

アジア・太平洋研究センター主催，総合政策学部共催講演会 ＜シリーズ「朝鮮半島を俯瞰する」第3回＞

日 時：2020 年 11 月 18 日（水）

場 所：南山大学 オンライン講演会

テーマ：中国は朝鮮半島をどう見ているか——米中対立の時代に——

報告者：中川 孝之（読売新聞中国総局員・前瀋陽支局長）

シリーズ「朝鮮半島を俯瞰する」第3回講演会は，読売新聞中国総局の中川孝之記者に講演をお願いした。あらためて指摘するまでもなく，中国は朝鮮半島情勢に大きな影響力を持っている。北朝鮮にとって「後ろ盾」としての中国との関係は死活的だし，韓国にとっても経済関係を背景として中国はますます大きな存在になっている。米中関係が厳しさを増す状況下，中国が朝鮮半島にどのように向き合うかは，複雑化する東アジア情勢のなかにあって国際社会の注目するところである。そうした観点から，中川記者には中国から見た朝鮮半島情勢について検討してもらった。概要は以下の通り。

中国の習近平政権の朝鮮半島を巡る諸問題への対応について俯瞰する。

第一に，習政権が中国軍の朝鮮戦争参戦 70 周年をどのように政治利用したかについて報告する。習国家主席は 10 月 23 日，北京で開いた記念大会で，「米国の不敗神話を破った」「極限まで圧力をかけるやり方は通用しない」と演説し，米国批判を行った。北京の博物館で開催中の 70 年記念展には公務員らが動員され，複数の映画やドラマも制作中だ。米中対立の長期化に備え，国内引き締めキャンペーンが展開された。

第二に，2018～19 年に計 5 回に及んだ中朝首脳会談を振り返る。習氏は中朝の伝統的友誼を復活させ，中国の頭越しに朝鮮半島のパワーバランスが変化することを防ごうとした。北朝鮮の金正恩朝鮮労働党委員長には，中国が非核化の途中段階でも支援すると約束し，米朝首脳会談に臨むよう促した。米トランプ大統領に対しては，非核化での要求事項を正恩氏に直接伝えるなどして，米朝首脳会談の「促進役」を果たそうとした。米中対立が深まる中で，北朝鮮カードを活用し，米国の対中圧力を和らげる思惑もあった。

第三に，中国の北朝鮮に対する影響力を考察する。中国は北朝鮮の核・ミサイル開

発への懸念から、2017年に複数の国連制裁決議に賛成した。だが北朝鮮の混乱への懸念から原油供給の停止には反対し、圧力行使に「限界」があることを示した。中国は現在、北朝鮮労働者の中国での稼働を「黙認」している。北朝鮮が他国と交戦すれば、中国が軍事支援することを定めた中朝友好協力相互援助条約について、中国は見直しを示唆して圧力を掛けたことがある。だが、北朝鮮を過度に刺激することを避けるため、実際に軍事支援するかは曖昧にしたままで、締結60年となる来年は自動更新される可能性が高い。

第四は、中国の対韓国政策について報告する。習政権は、韓国を非核化問題のパートナーとして重視せず、米国の「対中包囲網」を揺さぶる対象として圧力を掛ける。朴槿恵政権の発足当初は蜜月関係を築いたが、韓国がTHAAD配備に踏み切った後は経済的な報復に及んだ。関係改善を求めた文在寅政権には、THAADの追加配備をしないことなどを文書で表明させ、将来の米韓連携の強化を封じ込めた。

米国のバイデン政権誕生後は、中国は当面、米朝の出方を見極められると思われる。基本姿勢は、北朝鮮寄りの立場を維持しつつ、制裁緩和を求めるものとなる。米朝関係が険悪化し、半島情勢が危機的な状況に逆戻りすれば、中国は多国間協議の開催を模索する可能性もある。その帰趨は米中関係に左右されると思われる。

番外編として、台湾と朝鮮半島問題の関係について説明する。中国にとって朝鮮戦争への参戦は、台湾解放の機会を失った歴史でもある。習氏は「一国二制度」方式による平和統一を呼びかけてきた。だが、香港に6月、反体制運動を封じる国家安全維持法を導入したことで、台湾では「一国二制度」方式を拒絶する世論が大勢となった。中国には台湾問題に集中するためにも、朝鮮半島の安定がこれまで以上に求められる状況となる。

(文責：平岩 俊司)